

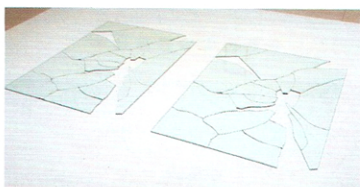
知性とユーモアで、鑑賞する人の五感に訴えかける。

横浜トリエンナーレ2008に参加したばかりのホルヘ・マキ。日本でもその名を知られつつあるが、同時期に「ニューオーリンズ・ビエンナーレ」にも出展するなど、近年は世界中のビエンナーレにノミネートが続く。名実ともに、国を代表する作家だ。

壁に等間隔で直線状に打ち込んだ釘に真横から照明を当てて、影による架空のラインを描いた『オリゾンテ』(02年)や、デジタル時計の表示をマッチ棒で24時間表示した『リアルタイム』(07年)など、鑑賞者の分析力を問うマキの作品には、数学の問題を前にするような感覚を感じる。ユーモアを備えた還元主義的な作風は、人間の知性に鋭く訴える力があるのだ。一方、『キリストの昇天』をはじめとする音楽家エドガルド・ルドニツキーとのユニット作品は聴覚をも刺激する。



●1963年生まれ。ブエノスアイレス国立美術学校で学ぶ。87年にはトランス・アヴァンギャルドに対抗するアーティスト集団「グループ・デ・ラ・X」に参加。世界中のビエンナーレでいま、引っ張りだこのアーティスト。



『Vidas Paralelas』

1998年 ガラス2枚 60×80cm

そっくりに割れた2枚のガラス板。1枚は実際にハンマーで割ったもので、もう1枚は、それを真似てカッターで精巧に切り刻んだもの。偶然に挑み、フィクションとノンフィクションの差異を問う作品。

『キリストの昇天』

2005年

インスタレーション/
パフォーマンス

礼拝堂の天井フレスコ画と同じフォルムのトランポリンを真下に設置。ヴィオラの演奏に合わせて、天国を描いたフレスコ画に向かってパフォーマンスが飛び跳ねるというインスタレーションである。05年ベネチア・ビエンナーレ出展作品。



Photo by Alejandro Ventura



『無題』

2006年
油絵
200×210cm

ロペス自らが大切な作品のひとつという絵画。伐採された大木に、無残に山積みされた動物の屍。その奥で、屋外で調理する女性たち。人間の無意識による生態系破壊を批判する作品だ。目玉のような模様は無数のクジャクの羽がメッセージ性を強めている。



『無題』

2001年 油絵 158×198cm

2台の色違いの車椅子が、まるでひとつの物体のように重ねて描かれている。背景との色彩のコントラストから、車椅子の構造が浮き彫りに。初期の作品を買くロペスの作風が顕著に表れたアクリル画。

Mariana López **マリアナ・ロペス**

一見、無秩序なもの のカラーージュが生む、 美しい混沌の世界。

近年、海外での発表の場が増えているマリアナ・ロペスは、若手アーティストの注目株だ。

フラットな背景に日常の風景を描いた絵や静物画が多かった昔に比べ、最近はキャンバスいっぱいに無関係とも思えるさまざまなものを描いた油絵が目立つ。日常の風景、ポルノグラフィティ、廃棄物、世界の名画などが、遠近法に縛られることなく描き足されていくその作品は、時間や空間を軸としない、混沌とした夢世界のよう。

08年の11月には、ニューヨークのダンボ・アートセンター（99ページ参照）主宰のアート・イン・レジデンスに参加。『Southern Exposure』と題されたその企画は、アルゼンチンとチリのアーティスト8人を招いて実施したもの。成果は同センターにて09年1月18日まで公開中だ。



●1981年生まれ。98年にアントルチャ基金の奨学金でセルジオ・バサンのもとに学ぶ。2005年にニューヨークの「クラヴェッツ/ウェービー・ギャラリー」で、07年にボストンの「ライス・ギャラリー」でアメリカでの個展が増加中。